関西理学療法学会　一日研修会　デイセミナー第 3 講

『立位姿勢・歩行動作分析の工夫』

鉢嶺医院リハビリテーション科
池田幸司
六地蔵総合病院リハビリテーション科
藤本将志

歩行動作は臨床場面で最も問題に挙げられる動作の 1 つである。トイレ動作や入浴動作などの身のまわり動作から家事などの生活関連動作においても、目的とする行為・作業場面への移動手段として歩行動作が含まれる。

トップダウン評価では、動作観察より動きの異常性を運動学的に捉え、仮説した問題点の分析をすすめていく。歩行動作分析の場合、まず動作観察の段階で難渋することは多い。その理由の 1 つとして、歩行動作を構成する運動が多いことが考えられる。歩行は全身運動であり、立脚側と遊脚側の動きが左右交互に連続しておこる。体幹・骨盤肢位の変化や四肢の関節運動は歩行周期全体を通して生じ、その全てを観察して 1 つの動作としてつなげていくのは大変である。また動作観察にて全ての異常な動きを運動学的に表現できたとしても、分析する過程が難しいことも経験する。動作分析においては、目に見える全ての異常性が問題とは限らず、問題点の関連性（ストーリー）や順序性の仮説をたてる必要がある。

今回、歩行動作における動作観察と動作分析のそれぞれの工夫を考えた。動作観察で重要なことは、まずどの時点でどんな実用性の問題があり、それに関連する現象を正確に捉えることである。そこで歩行動作観察の工夫として、体幹と骨盤の動きに着目した観察をおこなうことで問題となる現象を絞り込む過程について説明する。また姿勢・動作分析の工夫では、ハンドリングによる評価から問題点の関連性や順序性の仮説をたてる方法について、立位姿勢を例に挙げ実技を交えて解説する。